

Wakayama University Tourism Update

Semiannual Newsletter of Tourism Education & Practice

WTU Spring/Summer 2021



Contents ー目次ー

1. Reports ー和歌山大学観光学部生の国際 / 地域活動報告ー
2. Topics ー過去のイベントとニュースー
3. Future Events ー今後のイベント紹介ー

■ 地域インターンシッププログラム Local Internship Program (LIP)

「瀬戸内カレッジ 2020」(山口県岩国市、愛媛県新居浜市)

橋口 佳奈さん (13 期生 / 名古屋大学教育学部附属高等学校出身)



はじめに私たちの LIP の名前にも付いている「瀬戸内カレッジ」とは、J R 西日本・各自治体・大学が連携し、若者視点を活用した地域活性化、旅行需要の喚起、学生の成長機会の創出を目指す産官学のプロジェクトです。

和歌山大学からは、2つのチームに分かれて参加し、瀬戸内地域における観光課題の解決策提案や魅力発信を主に行ってきました。担当した市町村は、山口県岩国市と愛媛県新居浜市です。両班ともに、担当の市町村が作成した資料を基に「この地域における観光業の役割とはなにか」「観光業の問題点はどこか」について分析を行い、その後、9月に一泊二日で現地実習を行いました。現地実習では主要な観光地巡りはもちろん、その地域に住んでいる人たちに話を聞いたり、市長表敬を行ったりすることで、私たちが担当した地域の皆さんと一緒に観光業の在り方や発展の仕方についての理解を深めました。現地実習後に、両班ともにオンラインでの会議を重ね、「観光課題をどう改善していくのか」その方法について話し合い、プレゼンテーション資料の作成を行い1月に開催された最終報告会に臨みました。

岩国市の特徴は、錦帯橋をはじめ着物に合う雰囲気が広がっていること、めでたい意味を持つ特産品が多いことです。これらを活かし、市民に向けたハレの日の撮影プランと岩国基地軍人にむけた元服式体験プランを考案しました。

新居浜市は、産業都市として栄えた市です。しかしながら、高齢化や定住人口の減少により街の活気がなくなりつつあるという背景を持っています。そこで観光という新しい産業によって街を活性化させたいということを新居浜市が瀬戸内カレッジに望んでいました。現地実習や市役所の皆さんとの交流から、新居浜市の観光課題をいくつか上げそれを解決できるようなプランを提案しました。今ある観光地を最大限に活かし尚且つ泊まってもらうことで観光消費額をあげてもらうための「ナイトマイントピア」、新居浜市の名物であるざんきをアレンジした「ざんぎらず」の提案をしました。

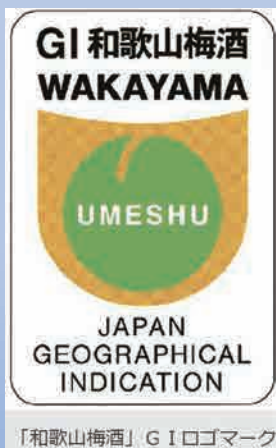
1月の最終報告会では、愛媛県新居浜班が旅行会社・自治体特別賞を受賞することができました。残念ながら、最優秀賞をもらうことはできませんでしたが、新型コロナウイルスの影響で思うような学生生活が出来ない中、実際に現地に足を運び、現地の人と交流をし、そしてその土地の観光について向き合うことができた経験はとても貴重であり、これからの大学での学びのモチベーションにも繋がりました。



■ プロジェクト自主演習

「地理的表示 (GI) 制度に基づく「和歌山梅酒」ブランド構築プロセスを体験することにより観光目的地の競争優位性を学ぶ」(和歌山県)

岩瀬 菜優さん (13 期生 / 大阪府立四條畷高等学校出身)



皆さんは「地理的表示: Geographical Indication (以下、GI) 制度」をご存知でしょうか。「GI 制度」とは、品質や社会的評価といった特定の産地ならではの特性が確立されている場合に、当該産地内で生産され、生産基準を満たした商品だけがその地域ブランドを独占的に名乗ることができる、という制度です。GI 制度を導入することにより、地域ブランドによる他の地域との差別化、消費者による信頼性の向上などが見込めます。

和歌山県内で収穫された新鮮な梅を使用した「和歌山梅酒」は、2020年9月7日に指定され、酒類の中では全国13件目です。和歌山梅酒は爽やかな風味の酒としての特性だけでなく、急傾斜で降雨が多く、古来より発酵食品の製造が盛んな地域で造られたという特性も含め、認められました。

このプロジェクトは、GI 制度を導入した「和歌山梅酒」のブランド構築プロセスを知り、それが観光目的地の競争優位性にどのように関係するのかを学ぶことを目的として2020年11月に活動を開始し、現在13期生6名、14期生4名がこのプロジェクトに参加しています。主な活動内容として、ゲスト

をお招きした意見交換会やプレゼンテーションの作成、PR 動画への出演などを行いました。新型コロナウイルスの影響によりほとんどがオンラインでの活動になってしまいましたが、国税庁やGI和歌山梅酒管理委員会、南高梅発祥農園の紀州高田果園の方の協力の下、「GI 和歌山梅酒」について商品提供者の視点から深く学びました。また、対面での活動はPR 動画撮影の一環として、12月に梅酒製造に携わる株式会社中野BC様と株式会社ウメタ様、梅農家の有本農園様のもとを訪問し、インタビューを行いました。プロモーションビデオの撮影を兼ねており、緊張しましたが、梅酒に対するこだわりや、GI認定に向けての苦労やこれからの展望についてうかがうことができました。

GI制度の仕組みや実績など基本知識の学習のみならず、原材料である梅の生産から商品の開発プロセス、プロモーションなどの現場を視察し、実践的に学びを深めることができました。実際に製造の現場を訪問してみて、多くの人が和歌山梅酒の製造に関わっていることを知り、プロモーションの材料の一つとして利用するべき価値があると感じました。そして、GI認定により「地域ブランド」を観光客に対してアピールすることができるため、引き続き「GI 和歌山梅酒」でしかない観光プロモーションが行われることを期待しています。また、今後このプロジェクトでは梅を題材にしたバスツアー企画の造成や梅酒と合う料理のレシピ開発などにも取り組んでいく予定です。

➡ 学生の活動紹介！～「GI 和歌山梅酒」プロジェクト自主演習
<http://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2021031500022/>



■ Global Intensive Project (GIP) Global Learning Advanced 「Working bilingually with UNWTO Tourism Highlights」(Japan) 家郷 貴生さん (13期生/大阪府立住吉高等学校出身)

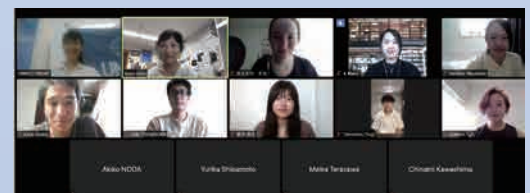
私は今年開催されたGIPの一つである「UNWTOの翻訳プロジェクト」に参加しました。主な活動内容としては、国連世界観光機関（UNWTO）から毎年発行されている、世界の観光情勢等をまとめた『Tourism Highlights』という報告書の2020年度版を日本語へ翻訳することでした。

私は和歌山大学に入学してから、一度はGIPの活動をやってみたいと思っていましたが、今年は新型コロナウイルスの影響もあり、なかなか海外に行き活動するという機会を得られませんでした。そんな中で、国内にいながら自分の英語能力を高め、世界の観光情勢に関して学べるこのプロジェクトに興味を持ち、参加するには今が絶好のチャンスだと思いました。

まず、8月25日にUNWTO駐日事務所の職員の方とオンラインで会議を行いました。ここでは翻訳業務の話はもちろんですが、新型コロナウイルスの影響により大きく変化した観光情勢等の話も聞くことが出来、大変貴重な機会となりました。

そしてその後、いよいよ『Tourism Highlights』の翻訳業務がスタートしました。やはり観光業界の報告書ということもあり、日常生活では使わないような言葉や通常とは意味が異なる英単語などもあり、なかなか大変な作業でした。また、自分の翻訳した文章が日本各地の観光に携わる方の手に渡るとなるとプレッシャーがかけられていましたが、逆に成果物がしっかりと残っていることによって達成感にもつながったと思います。更に、世界の観光情勢をいち早く知れたことも大きかったです。各大陸や各国ごとに違う傾向が出ている部分も多く、見ているだけでも面白いし、大変勉強になりました。今回の2020年度版は2019年の統計結果等が多かった為、まだ新型コロナウイルスの影響は出ていませんでしたが、おそらく来年の『Tourism Highlights』には大きくその影響が反映されていると思うので、今後も『Tourism Highlights』に注目していきたいです。

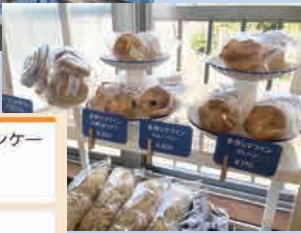
今年度は新型コロナウイルスの影響で、なかなか自分のやりたいことが出来なかった大学生が多かったと思います。私自身、海外渡航も、日本国内でのフィールドワークも、更には大学で気軽に友達と会って話すこともあまり出来ず、とてももどかしい一年でしたが、このような状況だからこそ、このプロジェクトに全力で取り組むことが出来、大きな達成感を味わうことが出来たのではないかと思います。



■ 地域インターンシッププログラム Local Internship Program (LIP)

「交流・関係人口増を目指したエリア体験型観光コンテンツの開発」(和歌山県海南市)

藪野 愛さん(14期生/帝塚山高等学校(奈良県)出身)



私たちは、海南市下津町大崎地区で地域インターンシッププログラム(LIP)を行っています。本LIPは今年度からの新規LIPで「交流・関係人口増を目指したエリア体験型観光コンテンツの開発」をテーマに発足しました。活動メンバーは、地域の交流に興味のある学生や大崎地区の街並みに惹かれた学生を中心に1回生3名・2回生1名で構成されています。今年度は新型コロナウイルス感染拡大に伴う域学連携活動の自粛に伴い、活動時期の遅延や対面活動での規制や禁止もあり、フィールドワークを中心としたLIPが充分に行えるのかどうか不安でした。しかし受け入れ団体の方のご協力のもと、今年度だからこそ取り組めたことも沢山あり、結果的には充実したLIPになりました。

本来ならば、テーマに沿って観光コンテンツの開発に取り掛かっていくはずでしたが、感染拡大の状況に鑑みて、今年度は次年度以降の活動を円滑に進めていくための準備期間にすることを目的に決めました。6月ごろから参加学生でオンラインミーティングを始めました。1回生が中心の本LIPでは、全員が初対面で、さらに慣れないオンラインミーティングだったので、最初はなかなか打ち解けることができませんでした。しかし、それぞれが現在までに行ってきた地域活動や、大崎地区に惹かれた理由などを話し合ううちにこれから始まる活動に期待が膨らんでいきました。

そして9月ごろに初めて現地に足を運び、受け入れ団体であるげんき大崎かざまち館の皆さんと顔合わせも行いました。初めて訪れる大崎地区は海や山に囲まれ、とても美しいところでした。受け入れ団体の方も私たちのことを温かく迎えて下さり、地域の抱える問題はもちろん、今後行いたい活動なども教えて下さいました。そして、10月以降は大崎地区に「地域おこし協力隊」として着任された方と何度もミーティングを重ね、げんき大崎かざまち館の認知度や、館の利用者動向を調べるためのアンケートの作成に取り掛かりました。隊員の方は、とても明るく親しみやすい方で、私たちと地域をつなぐサポート役を積極的に果たして下さいました。来年度の本LIPでは、これらのアンケート結果をもとに大崎地区の豊かな自然を活かしたエリア体験型観光コンテンツの開発を行おうと考えています。

最後に、今年度のLIPを通して私たちは大崎地区の方の地域活性化に対する熱意を感じました。同時に、関係人口の増加を考える際には、地域と観光客をつなぎ、地域のために考え動く、地域おこし協力隊のような支援者の重要性を実感しました。来年度からは、私たち学生も地域と観光客をつなぐ架け橋のような存在になれるように、現地の魅力発見や地域の方との信頼関係づくりを土台に、観光客調査などに尽力したいと考えています。

■ プロジェクト自主演習

「高大連携による「地域人教育」推進と「関係人口」づくりプロジェクト」(和歌山県紀美野町)

烏野 笑奈さん(13期生/りら創造芸術高等学校(和歌山県)出身)



私たちは、2020年12月13日に開催された「世界民族祭2020」に参加しました。「世界民族祭」は、紀美野町にあるりら創造芸術高等学校と地元住民で作られる祭りで、町内に世界の民族が集まり、芸術や音楽、舞踊、食などを通じた交流を行なっています。第12回目であった今回は、新型コロナウイルスの影響で初めてのオンライン開催となりました。これまでとは違った形でありながら、映像の力を活かし、様々な国の方へのインタビューや民族芸能のパフォーマンス映像、若者と地域の関係人口をテーマにしたシンポジウムなど、多様な形で楽しめる民族祭となりました。実際に祭り会場に向かなくても、ライブ配信の形にすることでより多くの方が参加でき、また映像をアーカイブ化することで当日見逃した方にも見ていただけます。

世界民族祭をきっかけに結成したこのプロジェクト自主演習からは、高大連携企画「つながる「きみの」民族祭コーナー」を発表しました。この企画は、世界民族祭を通して人や町が元気になっていく様子をインタビュー形式で配信するといった企画で、初回を記念して民族祭の発案者であるりら創造芸術高等学校の山上範子校長先生にインタビューしました。山上先生は、世界の民族がそれぞれの文化や芸術を紹介することで、参加者各々、特に若者が自分のアイデンティティを再発見し、お互いの文化を受け入れることで世界は一つであるという認識につながってほしい

という想いで世界民族祭を立ち上げました。この民族祭が誕生するまでの道のりと、発案者として今後の世界民族祭に何を期待するかなどについてお話を伺いました。私たちはこの企画を通して、世界民族祭が「地域おこし」に繋がっていることを視聴者に理解してもらい、それがもたらす地域活性化の可能性に希望を持つことで自身の生きる意味・幸せに繋がることが目指しています。今後は山上先生に続き、世界民族祭を見守ってきた地域住民や出演者らにもインタビューシリーズ化することを検討しています。

高大連携として、和歌山大学の学生と学生団体1LDKの高校生（りら創造芸術高等学校・海南高校大成校舎）が一丸となって今回の企画に取り組み、映像作品として残すことができました。収録本番のインタビュアーの役は高校生と大学生が交代で担い、急な変更にもスムーズに対応する高校生たちの責任感に感動しました。本番に至るまでの企画会議でも、高校生の細かな気づきや新鮮なアイデアを参考にさせていただきました。高校生は大学生の発言の仕方などが参考になったと言っており、お互い交流ができて良かったと改めて思いました。これからも地域の高校生と和歌山大学の学生との交流を通して地域の発展に取り組んでいきたいです。

- ➡ 12/13（日）開催！～「世界民族祭2020」（オンライン開催）にて
「和歌山大学観光学部による地域交流企画～地域と人を結ぶ～」が配信されます！
<https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2020120300031/>



■ 地域インターンシッププログラム Local Internship Program (LIP)

「青みかん（摘果みかん）の価値を上げる」（和歌山県有田市）

望月 なぎささん（13期生／山梨県立甲府西高等学校出身）

有田市の特産品である有田みかんは、現在各農家の高齢化による耕作放棄地の増加がみられ、みかんの生産量も減少傾向にあります。そこで新たな有田みかんの価値を見出し、みかん産業を持続的なものにするために宮原青みかん LIP は始まりました。特に、みかんの収穫前に大きさを揃えるために捨てられる「青みかん」の価値向上に取り組んでいます。また、これらの活動の拠点は令和2年3月に有田市宮原町の旧駐在所をリノベーションして誕生した地域交流拠点「宮原さん家」とし、宮原地区の町づくりを進めています。

このプロジェクトは、レシピ開発、商品開発、イベント企画、広報の4つの班から構成されています。今年度は、どの班も青みかんについての知識をつけ、アイデアを深めていくことに重点を置いて活動しました。7月に地域の方との顔合わせと青みかんについての学習会を行い、本格的な活動が始まりました。8月に各班がアイデアを地域の方に提案し、その後9月から11月にかけて実際に現地に伺いました。現地で伺った話や収穫体験をもとに12月から2月にかけてさらに案を深め、2月に地域の方に再度案を提案させていただき、今年度の活動は終了しました。

このプロジェクトでは、新しい商品やイベントを作るため、発想力が重要になりました。青みかんの特徴や地域の雰囲気などそれらを全て生かした案を考えることはとても難しく、何度も話し合いや試行錯誤を繰り返しました。その中で地域の方にたくさんの意見をいただき、住民の思いや今まで大切にしてきたものを知ることができました。また今年度は新型コロナウイルスの影響により全員で現地に行けなかったり、会議も全てがオンライン上で行われたり、思うように活動ができなかったことも多かったです。しかし、私はこのような状況だからこそ得られたことや考えられたことも多かったように感じます。地域の方との意見交換やメンバーとの話し合いで、これからの時代に必要となってくるオンライン上でのコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力をつけることができました。また思うように活動ができなかった分、自らで様々な場合を想定して企画を進めていくことの大切さも学びました。このように、オンライン上での活動が主だった今年だからこそ身に付いた力もありました。

来年度は今年度考えた案を具体的に形にしていく段階に入ります。今年度以上に試行錯誤が求められると思いますが、私たち自身が感じた宮原町の魅力を大切に活動していきたいです。メンバーも多少変わることになりますが、この活動が今後長く続いていき、そして宮原町の方に愛される活動になるようにメンバー全員で取り組んでいきます。そしてこの活動を通して和歌山県が誇るみかん産業が今後も長く続くきっかけになればと思っています。



■「チャクラバルティー・アビック教員ゼミ 公開発表会」

柏木 美咲さん（12期生／雲雀丘学園高等学校（兵庫県）出身）

山本 恭平さん（12期生／大阪府立生野高等学校出身）



2021年2月9日、和歌山大学観光学部で私たちが所属しているチャクラバルティー先生のゼミの公開発表会を開催し、現3年生9名が現在のゼミ活動や各ゼミ生の研究課題について発表しました。当初は同学部のキャンパスにて公開発表をする予定でしたが、新型コロナウイルスの影響でオンライン開催に変更し、およそ20名に参加いただきました。今まではゼミ生同士が互いの研究について知る機会があまりなかったため、各々の研究を理解する貴重な時間となりました。また質疑応答の時間には、各発表についての活発な議論が交わされ、卒業論文作成に向けてのモチベーションを向上させることができました。

今回の発表会の特徴は、企画から運営までの一連の流れをすべて学生が担ったことであり、リモートを中心とした運営の中でもチームワークを発揮することができました。当日は、発表者だけでなく参加者を巻き込んで議論を進めることや、個人の研究を短時間で人に伝えることの難しさを学びました。

チャクラバルティーゼミでは、アクティブ・ラーニングを採用しながら観光という現象の複雑性や多面性を分析することに取り組んでいます。各学生は自由に研究フィールドを設定し、そのフィールドを基に卒業研究を進めています。

発表会では、最初の約1時間を用いてゼミ活動の総括として「観光学関連の調査方法、特に質的研究のやり方についてのまとめ」のグループ発表を行いました。その後、個人発表では、トレイル・ツーリズム、ダーク・ツーリズム、世界遺産、国立公園、防災観光、スクーバダイビングなど、幅広いテーマで取り組んでいる研究を発表しました。最後はトークセッションの時間が設けられ、各学生や参加者も交えての意見交流が行われました。学生間で各々の研究に対する理解が深められたことや、活発な議論が行われたことが、本発表会の成果として挙げられると思います。

最後になりましたが、今回の機会をいただいた観光実践教育サポートオフィス、ご指導いただいたチャクラバルティー先生、また、参加していただいた約20名の方々にお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

■ 学生シンポジウム

「AY2020 Joint Student Symposium on Tourism, Hospitality and Leisure Research
(2020年度ツーリズム・ホスピタリティ・レジャー研究合同学生シンポジウム)」

戸高 英里子さん（12期生／延岡学園高等学校（宮崎県）出身）



2021年1月23日に開催された Joint Student Symposium on Tourism, Hospitality and Leisure Research に参加しました。（以下 JSS と省略）第三回目となる今年度は、新型コロナウイルスの影響でオンラインでの開催になりましたが、和歌山大学、立命館アジア太平洋大学、山口大学、琉球大学、関西外国語大学から学部生、大学院生合わせて約80名が参加しており、非常に規模の大きな研究発表会だったように思います。発表は全て英語で行われました。

そんな中、私は『サーフィン部活：宮崎県青島中学校における体育と部活動の関係』という研究テーマで発表しました。

私が所属するゼミでは、観光というレンズを通して、人文・社会および Lifestyle sports や Surf culture について研究しています。2020年9月に、日本屈指のサーフタウンである宮崎県に、ゼミ生でフィールド調査を行いました。宮崎は2019年に、サーフィンのワールドカップと言われる「ISA World Surfing Games」が開催された土地でもあり、日本だけでなく世界からも注目されているサーフスポットです。リアス式海岸が連続する県北部の日豊海岸から南国らしい明るい海が開ける日南海岸まで、約400kmにわたって海岸線が続く宮崎県。県内各地に変化に富んだ多くのポイントがあり、初心者から上級者まで、誰もがサーフィンを楽しむことができます。実際に私たちも4つのサーフポイントでサーフィンをしたのですが、波の強さや形が全く異なり、非常に面白かったです。

フィールド調査中、2020年に公立中学校初、サーフィン部を部活動に取り入れた宮崎市立青島中学校の存在を知りました。

ここ10年間、伝統的な主流スポーツとは違い、攻撃性、競争力ではなく、参加、創造性に基づくアイデンティティを提供している、いわゆる包括的で反競争的な、ルールに縛られない構造でできたLifestyle sportsが若年層の間で人気です。しかし、それが日本の教育の現場で使われる事例は少ないのが現状です。青少年のスポーツの中心的な場として大規模に成立している日本の部活動文化にサーフィンを取り入れた理由は何なのか。取り入れたことによって教育にどのような変化をもたらすのか。青島中学校サーフィン部を設立した校長先生へのインタビュー調査で、日本が抱える社会的な問題も浮き彫りになってきました。

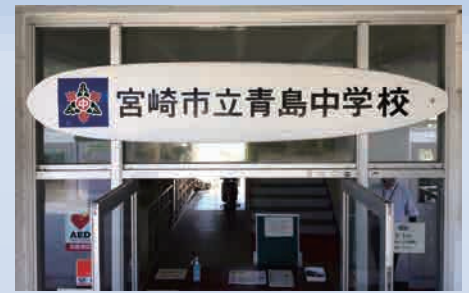
今回は、研究テーマを設定した背景、調査方法、今後の予定についての発表にとどまりましたが、今後は2週間ほどの青島中学校サーフィン部へ密着インタビュー調査を予定しています。調査後は、研究内容にももっと深みと厚みが出ると思います。

JSSの閉会式では、事前に提出された発表要旨と当日の口頭発表をもとに、4つの賞が準備されていました。その中の一つであるInnovative Research Awardに私の研究テーマを選んでいただきました。

今後も受賞に恥じぬよう、日本に未だない研究に取り組めることに誇りを持って、卒論研究に励みたいと思います。

➡ 学生の活動紹介&受賞しました！～学生シンポジウム「Joint Student Symposium on Tourism, Hospitality and Leisure Research」にて研究発表を行いました！

<http://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2021020400067/>



■「日本版 持続可能な観光ガイドライン」開発協力

寺澤 舞花さん（11期生／雲雀丘学園高等学校（兵庫県）出身）

2020年6月に「日本版持続可能な観光ガイドライン（以下、観光指標）」が観光庁及びUNWTO駐日事務所により発行されました。この指標は持続可能な観光地マネジメントの促進を目的に、自治体や観光地域づくり法人（DMO）を中心とした観光地マネジメントに関わる方を対象としています。観光指標はグローバル・サステナブル・ツーリズム協議会（GSTC）が定めた観光の国際基準である「GSTC地域基準（GSTC-D）」に日本の特性を反映して作成されたものであり、世界水準の観光地マネジメントの運営が可能になりました。

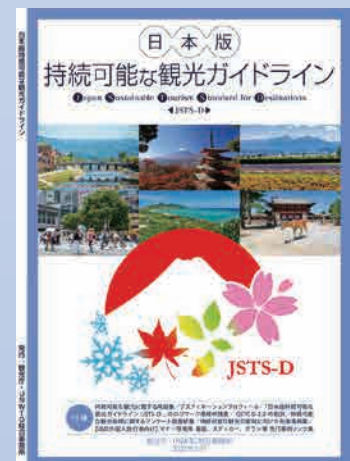
私が観光学部に入学し一番初めに興味を持ったトピックが「持続可能な観光」でした。学びを深める中で持続可能な観光の実現には、地域の環境・文化・社会経済への影響を十分に考慮し、これらの3つの側面とのバランスを保った観光地マネジメントが必要であることを理解し、現代におけるその重要性と意義を強く感じました。そんな中、所属ゼミの担当教授である加藤久美先生から、この観光指標の作成メンバーに加わらないかとお声がけいただき、京都市の現状調査を担当しました。調査を進める中で、観光地マネジメントの現状把握の難しさを実感しました。特に自治体では各部署に分かれて様々な取り組みが実施されています。持続可能な観光は環境・文化・社会経済だけでなく、住民や事業者など広範な分野に及ぶため、部署を超えた総合的な評価が求められます。そのためにも客観的な視点から作成された観光指標は必要不可欠です。

また2020年11月に京都市で開催された「GSTCトレーニングプログラム」に参加し、観光指標を導入するための研修を受けました。この研修には自治体やDMO、経営学を専攻する大学生が参加しており、刺激的な3日間でした。研修では、観光指標の各項目について海外の事例を用いた解説や、他の参加者とのディスカッションを通じて観光指標のより実践的な応用方法について検討しました。後日、修了試験にも合格し、GSTCから証明書をいただきました。この研修は自治体やDMOには必須となるものであり、今回参加できたことは私自身の今後の学習や就職へのモチベーションにもなっています。

持続可能な観光指標の活動を通じて、観光を学ぶ意義を改めて認識することができました。私は4月から和歌山大学の大学院観光研究科への進学が決まっています。大学院ではこの観光指標を自身の研究に活用し、より知見を深めていきたいと考えています。

➡ 教員・学生の活動紹介！～観光庁・UNWTO駐日事務所プロジェクト「日本版 持続可能な観光ガイドライン」の開発協力

<https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2020063000036/>



■「2020年度和歌山大学『観光・地域づくり』講座」を開催しました！



2020年10月から12月にかけて「2020年度和歌山大学『観光・地域づくり』講座」を和歌山県との共催で実施しました。今年度は新型コロナウイルス感染症の影響を鑑み、ZOOMウェビナー機能を利用したオンライン公開講座（ライブ配信）となりました。

本講座は2008年度から2019年度まで開講してきた「観光カリスマ講座」を受け継ぎ、名称を新たに開講したもので、観光庁「中核人材育成講座」公認プログラムにもなっています。

全5回の講義で構成された本講座には、延べ397名の受講生が全国各地から参加し、観光地や観光ビジネスで活躍されている講師によるさまざまな観点からの実践事例を拝聴するとともに、和歌山県をはじめとする各地域の観光振興とまちづくりの方向性を考えました。

各講座のプログラムなど詳細は下記URLをご参照ください。

➔ 10/16（金）より開講！～「2020年度和歌山大学『観光・地域づくり』講座」のご案内&受講者募集！

<https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2020091500010/>

■ 2020年度学位記・修了証書授与式が執り行われました



2021年3月25日(木)、2020年度学位記・修了証書授与式が執り行われ、観光学部生118名、大学院観光学研究科博士前期課程12名、博士後期課程3名が、それぞれ学士・修士・博士の学位を取得し、新たなステージへと旅立ちました。

新型コロナウイルス感染症の影響により、これまでのように卒業生・修了生、教職員や後輩などが一堂に会してお祝いすることが難しい状況ではありましたが、和歌山市民会館での授与式（インターネットライブ配信も同時に実施）、西4号館T101教室での各種表彰式（成績優秀学生賞、卒業論文賞、修士論文賞、ピアサポート賞、2020年度学部長表彰、観光学部教員表彰、グローバル・プログラム認定証明書交付）が執り行われました。

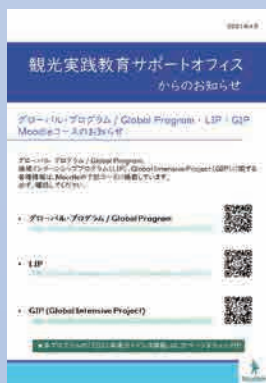
卒業生・修了生皆様の今後のご活躍を期待しています。

➔ 卒業生・修了生へ：学部長メッセージ

<http://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2021032500137/>

Future Events ー今後のイベント紹介ー

■ SO ガイダンス（GP2.0 & GIP/LIP）& Tourism Cafe を開催します！



2021年4月8日（木）は、観光実践教育サポートオフィスによるガイダンス DAY@Zoom！

午前の部はGP2.0（1年生対象）、午後の部はGIP/LIPガイダンス&Tourism Café（GP、GIP/LIP経験者を囲んでラウンドテーブル）（全学年対象）。

Zoom URLなどの詳細は、新入生ガイダンス/在学生ガイダンスで配布している「観光実践教育サポートオフィスからのお知らせ」をご覧ください。

■ 2021年4月8日（木）10時～12時 「国際・Global Program（GP2.0）ガイダンス」

■ 2021年4月8日（木）13時～15時 「GIP・LIPガイダンス & Tourism Café」

編集・発行

(2021年4月発行)

和歌山大学 観光学部 観光実践教育サポートオフィス

〒640-8510 和歌山市栄谷930 和歌山大学西4号館K216室、K116室

TEL 073-457-8553 / E-mail tourism-er@ml.wakayama-u.ac.jp / URL <http://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/>

*本誌はWebページからも閲覧できます→<http://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/fuzoku/tourism-education-research/WTU.html>

